

本誌主催セミナー「AIと放送メディアの活用を考える」報告

実用的なクラウドAIサービスが増加 最新研究では人間を凌駕する機能も

メタデータの自動生成など放送局向けAIサービスが揃ってきた。すでにクラウドで提供されているサービスを利用すれば、少ない費用負担で最新のAIで放送局の業務を効率化、省人化、低コスト化できる。さらに研究レベルでは、番組やCMの魅力や効果を正確に予測するなど、ベテラン社員にも不可能な機能がAIで実現しつつある。本誌主催セミナー「AIと放送メディアの活用を考える」(2月26日開催)では、クラウドで放送局向けAIサービスを提供している代表的な企業であるマイクロソフトとSpecteeが最新サービスを解説、東大の山崎俊彦准教授が放送局に関連したAIの最新研究を紹介。さらに放送局がAIにどう対応していくべきかも議論した。(取材・文:渡辺 元・本紙編集長)



本誌主催セミナー「AIと放送メディアの活用を考える」の会場。NHK、キー局、ローカル局、ケーブルテレビなどのメディア関係者が受講した

メタデータを自動生成

AIを活用した放送局向けサービスが急速に進展している。最新サービスに関する数カ月前の情報でさえすぐに古びてしまう。現在、放送局向けAIサービスの主流は、クラウドによって提供するサービスだ。特にマイクロソフトはこの分野で高機能のサービスを多数揃えている。今回のセミナーでは、日本マイクロソフト株式会社 コマーシャルソフトウェアエンジニアリング本部 プリンシパル ソフトウェアデベロップメントエンジニア 山田大有氏が、マイクロソフトがクラウドで提供している最新の放送局向

けAIサービスについて説明した。

「マイクロソフトはコンピュータをあまり使いこなせない、あるいは使いこなせる人がいっしょらない企業でも比較的簡単にディープラーニングを使えるように、技術をパッケージ化して提供し、APIにして公開しています。このパッケージの数が他社

に比べて圧倒的に多いのが特徴です」(山田氏)

Microsoft Azureで提供しているVideo Indexerは、映像の中から発言内容を文字にしたり、人物の顔を認識するなどして、各種メタデータを自動で生成できる。Video Indexerは当面は無料で試すことができるので、読者の放送・映像関係者はぜひ試していただきたい。<https://vi.microsoft.com/>にアクセスしてクラウドに映像をアップロードすると、メタデータが生成される。誰が何分何秒～何分何秒にかけて写っているということだけでなく、誰が全体の何%に写っているかといったデータも得ら

れる便利なツールだ。画面に何が写っているかは、約2,000種類のを判定できる能力がある。個人の顔や歴史的建造物を識別してメタデータを生成することも可能だ。タレントや政治家など顔の写真があれば、AIエンジンに登録できる。発言などの音声から重要なキーワード、感情などのメタデータを作ることでもできる。

「メタデータではそれが人の名前なのか、車なのか、建物なのかといった属性のデータが非常に大事だと考えています。今マイクロソフトはメタデータのキーワードから属性を判断するためのデータベースを公開しています。これによって一次メタデータから二次メタデータを生成することができます」(山田氏)。Video Indexerに最近追加されたのは、写っている企業ロゴや商品名を検知する機能だ。放送するCMの競合製品などを検知できる。「これらの機能は放送局からの『こういうメタデータが欲しい』という要望に基づいて用意しました」(山田氏)。

マイクロソフトはメタデータの自動生成や映像のチェックといった機能のAIツールを提供する一方で、ディープラーニングによる学習サービスも提供している。放送局は既存のAIツ